

## 初等部2年 国語

### 「言葉で音をあらわす」

鮫島道恵

2年生の国語に『音やようすをあらわす言葉』という学習単元がある。いわゆるオノマトペ擬音語（擬声語を含む）擬態語一の学習である。報告会では音に注目することで、児童の文章の表現が豊かになることを目指し擬音語を取り上げた。

#### I. はじめに

「みなさん 合ずをするまで目をつぶって耳をすましてください。」

これは2年生の報告の始めの言葉である。今、この時も私達の耳にはいろいろな音が聞こえる。では聞き取った様々な音は、どのように書き表したらよいだろう。2年生はいろいろな音を聴く時、目をつぶって耳をすまして聴き、そしてノートに書き記してきた。その学習の一端を報告会の場でお客様にも体験していただきたいと思ったのである。

「日本語は英語などのヨーロッパ諸言語と比べると、オノマトペ（擬音語、擬態語などの総称）に富んだ言語であるとよく言われる」と『オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ』の中に書かれている。（参考1）日本語のかな文字は表音文字である。そのために擬音語擬態語が豊かなのである。

『現代擬音語擬態語用法辞典』（参考2）によれば、擬音語とは「活字化できる音声連続および発音できる文字表記によって対象の音・声を表現したもので、一定の形と意味をもち、一定グループの人々（多くは同国語人）の間で抽象的・普遍的に通用する」とある。

しかし、この報告会では抽象的、普遍的な擬音語ではなく、自分で聴いた音を表現することを目的に取り組んできた。それは、音に注目し文章を書くことによって、表現が豊かに広がるのではないか、と思ったからである。

#### II. 報告会までの学習

##### ① 国によって表現の違う擬声語を学ぶ

1 学期の授業では、かたかなで書く言葉には4つあることを学んだ。「外来語」、「外国の地名や人名」、「擬声語」、そして「擬音語」である。その中で擬声語は国によって表現が違う。

自由学園では秋にデンマーク人留学生が来て体操を教えて下さる。初等部でもその授業が行われ体操を教えてくれたルイーセさんにデンマーク語の擬声語を教えていただいた。犬は「ウォーウォー」、豚は「ウフウフ」、牛は「ムームー」…

国によっていろいろな聞こえ方があり、表現の仕方が違っていることに児童は驚き、様々な表し方があることを知った。

##### ② 音さがし 「サウンドスケープ」

『音さがしの本』（参考3）の中に、サウンドスケープ（音の風景）という言葉がある。「聞こえた音を紙にぜんぶ書き出してみよう」というものだ。辞書には載っていない、自分の耳で聴き自分が書き表した自分だけの音である。

音には自然の中の音、人口的な音など、様々な音がある。教室の中で、あるいは外へ出て、皆で音を聴き、書き表す作業をたくさん行ってきた。

##### ③ 生活の中の音を聴く

これは人工的な音と言ったらよいだろうか。雨の音も傘に当たった瞬間、人工的な音となる。人が作った音、立てた音を聴いてきた。

##### （ア）楽器の音

2年生は11月に「森の水車」の合奏発表を行った。そこではいろいろな楽器を使った。その時使った楽器の中からいくつかの音を聴き、かたかなで書いてみた。

・タンバリン：「シャリシャリシャカ」「ヂラヂラ

ガラ」「シャロシャロシャロシャロ」…

・トライアングル:「チーン リロリロリロリロリロ」  
「キローン キラキロキラキロキラキロ」…

・ウッドブロック:「キッコッ キッコッ」「コックンコックン」等とそれぞれに書いていた。

他にも水笛「ピュルルルルルルル」、カスタネット、クラベスやカタカタという楽器の音も聴いた。一人ひとりの聞こえ方、表現の仕方が違っていった。

児童達は「同じ楽きの音を聞いてもみんなの聞こえ方や表し方がちがうことにびっくりした」と感想を述べていた。また「音には高さがある」「響く音がある」、「硬いくて低い音がある」など、音の質の違いに気づく感想もあった。

#### (イ) 教室を歩く音

人工的な音として教室を歩いている時の音も聴いた。皆がびっくりしたこと1つに「小さな音が集まると大きな音になること」ということがあった。「静かに歩きましょう」と言われることがあるが、それはこのことを指しているのだと理解し、その後の生活の中で足音に気をつけるようになった。また歩き方で音の違いがあることもわかった。

その表現の中にトントン、ドンドンというものがあった。それについて「トに点(濁点)をつけただけで低い音と高い音が違って不思議だと思いました。」と書いていた児童がいた。小さな音、高い音を表す時には清音を使い、大きな音を表す時は濁音で表すことがよいとの気づきだった。

#### (ウ) 水道の音

次に水道の音も皆で聴いてみた。水道の出し方や、流しの種類(ステンレス流し、石の流し)、つまり水を受けるもので音が変わること気づき、その音も書いて表現してみた。その学習の時、自分の好きな音を見つけ「テンテンテンと聞こえた。たいこをたたいているようで きょくみたいだった」「水が歌を歌っているように聞こえた」「音楽みたい」との感想が聞かれた。

#### (エ) 家での音集め

家でも音集めをすることにした。すると夜、虫の声を聴き紙一杯書いてくる児童、お母様のお料理の音を聴き「何のお料理でしょう」とクイズにする児童、大好きな電車の音をたくさん書いてくる児童など、おさらいでも音集めを楽しんだ。

#### ④ 自然の中の音を聴く

初等部は自然に恵まれた学校である。学校内で聞こえる音に注意を向け聴いてきた。

#### (ア) セミの鳴き声

まだ夏の暑さが残る9月の教室には、せみ時雨が鳴り響いていた。どう聞こえるか、聞こえた通りにノートに書いてみた。

「ジーンウィンウィンジーン キチキチキチチチ ジーン…」  
「ジリジリジリジリジリ ズーブズズズズズ」  
「ビィビィゼィゼィゼィゼィ ジーンジンジンジン…」  
「ビッビッビッビッビッビッビッ」等々ずっと続くせみ時雨をそれぞれの表現でノートに書き綴っていった。

報告会では、聞こえたセミの声を同じ長さにまとめ呼吸を合わせ合唱の形で発表することにした。

すると12月に行われた報告会にもかかわらず、夏の情景が思い起こされた。音の記憶はその場の情景を再現できるのだと実感した。報告を聞いて下さった方からは「違いが時に一つを生み出すのだ」という感想をいただいた。

#### (イ) 音のスケッチ

自然環境に恵まれた学園の中を「音のスケッチ」と題し、音を集めて歩いた。鳥の声、風の音など自由に初等部内を歩いて音のスケッチをするのである。芝生や枯葉を踏んだり、自分で立てたりした音もその中に含めた。

「音のスケッチ」に外に出た時は、誰もが黙って目をつぶり音に聞き耳を立てた。姿は見えないが鳥がいることにも気づいた。それぞれ違った鳴き方をし、種類が違おうであろうことが想像できた。

芝生を踏む音はほとんど無音に近い。その音を「モシュモシュ」「スッスソソソソ」と表現した児童がいて、その表現力に驚いた。また枯葉は11月初旬ではまだ音とまらない新鮮な落ち葉の時期であった。それを「スンスンシャンシャン」と自分で聴いた通りの音で表現する児童もいた。しばらく時がたつと落ち葉は固くなり、それを踏んだ時児童は「ジャズジャズ バラバラ」と表現した。

静かにしていると小さな音がたくさん聞こえることや外で音を聴くと気持ちよいこと、自然の音の心地よさに気づくことができた。

この学習を行っていたある日、理科の浅川先生に鳥の声を聴きに外に連れて行っていただいた。鳥が鳴くと先生が「今鳴いた鳥はオナガ」「これは

ヒヨドリ」「今のは〇〇」…と教えて下さる。児童は鳥の鳴き声に必死で耳を傾け「ギーン」「ピューピュー」「ピチュピチュ」「ジョイジョイ」「ヨヨビー」とノートに書き取っていた。

⑤ 文学作品に触れる

国語の時間に宮沢賢治の『風の又三郎』(参考4)に出てくる詩を音読した。それには「どっどどどどど どどど どどど、…」と、とても強い感じの風の音が表現されている。児童はそこに出てくる風を強く激しい音と感じ取った。一方で、私達が音のスケッチの時、グラウンド奥にあるグリーンベルトで聞いた風の音は「ソー」「フー ササフー」「スースーサワサワ」と聞こえ、とても優しく私達を包み込むような心地よい風だった。

言葉の響きと、自分達の体験を通して、風の強さや優しさの違いを音の書き方や表し方によって表現できることを学んだ。

⑥ 音日記

前出の『音さがしの本』の中に「音の日記をつける」というページがあった。そこで「音日記」と題して日記の中に音を入れて書く勉強をすることにした。それを続けているうちにいろいろな児童が音日記を書いてくるようになり、表現が豊かになって、音を聴くことを楽しむようになった。

⑦ 雨の音を聴く

雨が降った日には皆で雨の音を聴いた。すると1人の児童が「耳をでっかくしてきいてみよう。」と言い、教室中がしんとなりメモを取り始めた。次に外に出たり傘をさしたり、水たまりのそばに行くなどして、思い思いに雨の音を聴いた。学習後の「けっこういい音がしたね。」というつぶやきが印象的であった。音を聴いている時に、少しの雨や水の音を表す時には半濁音を使うとよいこと、強い水の流れには濁音を使うとよく書き表せることへの気づきもあった。

Ⅲ. 報告会の準備

前述の通り、報告会の前にはいろいろな音をたくさん聞き、学習してきた。それを基に何を報告するかを皆で考えた。学習の過程では一人ひとりの詩の本を作りたい、皆で聴いた音を詩にして合作してみたいなどの希望が出てきた。そこで詩の合作づくりに取り組むことにした。

詩を作るにあたっては『りんごころりん』(参考5)をはじめ東久留米市の図書館から借りた擬音語の出てる絵本十数冊の読み聞かせを行った。それを聞いている途中、児童から「みんなリズムがある」という発言があり、詩の作成の際にはリズムを意識することが大事な要素となることに気づいた。そのことをふまえ、1人が一節を作りそれをあわせて詩にした時には、音の響きやリズムを何度も確認しながら言葉の並びを考えた。

また国語の時間には雨の音や、セミの声、楽器の音をかたかなで大きな紙に書くこと、美術の時間には雨の詩に合わせ、クレパスとポスターカラーを使って大きな紙に絵を描きバック作りも行った。

Ⅳ. 報告会の内容

報告は、1. はじめに、2. 楽器の音、3. せみの声、4. 音のスケッチ、5. まとめ、6. 音日記、7. 雨のし、と柱を立てて行った。

報告会は無音から報告を始めた。そして自分達が聞いてきた音の発表の他に、実際楽器をならしお客様にはどう聞こえるか一緒に聴いていただく方法もとった。またセミの鳴き声については皆で合唱のようにして「何の鳴き声でしょう」とクイズ形式にした。児童は答えて下さるだろうか、台本にない答えが返ってくるのではないだろうか、どきどきしていたが、お客様がクイズに答えて下さったり考えたりして下さって、生き生きしたり取りができた。

報告の最後には合作「雨の詩」を発表した。

『雨の音』  
やさしい雨がふっていた／「耳を大きくして音をきこう」とだれかが言った／耳をすますと雨の音耳をすまして聞いてみた  
シタシタシタシタシタ タッタ／シャパシャパシヤパシヤパ／シッラシラ シッラシラ／ピャピャピャピャ チャパチャ／ピャンピャン チャパピャン／ピッツンピッツン ピッピッツン／ポチョポチョ バチバチバラバツパ／シットントン シットントン／ポシポシポシポシポシ ポッポ／シャラチャラシラシラ シッ シッ シッ／チャピチャピ ポトン ポツン ポトン／ポッシポッシ シャラチャラシヤラ

かさをさして外へ行く／かさにあたって音がする  
ポッピンシャー ポンシャーポンシャー ポット  
ンシャー／トントシ トントシ トットット／  
ポリポリ ポリリン パチパチン パチパチン／  
トッチャン トッチャン ピョッ ピョッ／ポト  
ポトポトポト ピチャピチャポ／ピチピチチャブ  
チャブ ピッチャピッチャ／パラパラ バラバラ  
バラピンピン

教室前の水たまり／ポッチャン ポッチャン 音  
がした／ポタンポタン ポッポッポ／ポッチンポ  
ッチン ポッチッチ

やねから雨がおちてきて／大きな雨の音がする  
ボトボトボー ジョジョージョジョー／ポッチャ  
ンポッチャン ポッポッポ／ボンボボン ボンボ  
ボン／ドードドード ジジュッジュッ

雨はまだまだふっていた／ポチポチポチポチ ポ  
チザザザン／ピチピチピチピチピチピチピチ／チ  
ャップンチャップン チャッチャップン／チタチ  
タチタチタチタチタチタチ ピタピタピタピタ シ  
ラシラシラ

雨は歌／雨は音楽／かみさまがならすオルゴール  
／いつも 聞いている音だけど／耳をすまして よく  
聞くと／いつもと ぜんぜんちがう音／いろん  
な音があつまって 雨が合そうしているよ

## V. 報告会を終えて

初等部の恵まれた自然の中で児童は、柔らかな感性で全身を集中させて、自然や生き物が出す音を聴き取り、受け止めるということ、そして表現するという学習をしてきた。それは児童にとって貴重で楽しい体験となっていたと思う。

一人ひとりが聴いた音を発表し合うと、聴いている基は同じ音のはずなのに違った聴き方をしている、どれも素敵な音だというのが児童の感想だった。それは他者を認め合うに時ともなった。

## VI. 終わりに

この取り組みは国語のみの勉強ではなく理科や社会、音楽の学習にも関連する幅広いものだった。

日々の取り組みの中で、児童は固定観念を取り払い、柔らかく豊かな感覚で音を聴き素直に表現してきた。自然の音は一度しか聴けないかもしれない。だからこそ聞こえた音を大事にして記録し

てきた。

日本語はオノマトペが豊かであり、その楽しみもあると言われているが、報告会の取り組みを通して、聴いた音を自由に書き表すことのできる日本語の楽しさ、面白さを感じることができた。そして日記を書く時に擬音語を使うと表現の幅が広がり、日本語の持つ魅力や奥深さを実感したのである。また、文章が生き生きとした表現になったことはうれしいことであり、楽しい学びであった。

## 謝辞

最後になりましたが、この勉強を取り上げるところからずっと支え、アドバイスして下さった元初等部主幹宮本正子先生、また九州大学の増田健太郎先生、副担任の横山草介先生始め初等部の先生方に感謝申し上げます。



練習風景

## VII. 参考文献

1. 『オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ』 田守育啓／岩波書店
2. 『現代擬音語擬態語用法辞典』 飛田良文・浅田秀子著／東京堂出版
3. 『音さがしの本 リトルサウンド・エデュケーション』 R マリー・シェーファー 今田匡彦／春秋社
4. 『新編風の又三郎』 宮沢賢治著 新潮社版
5. 『りんごころりん ロシア民話』バホーモフ絵、宮川やすえ再話／岩崎書店